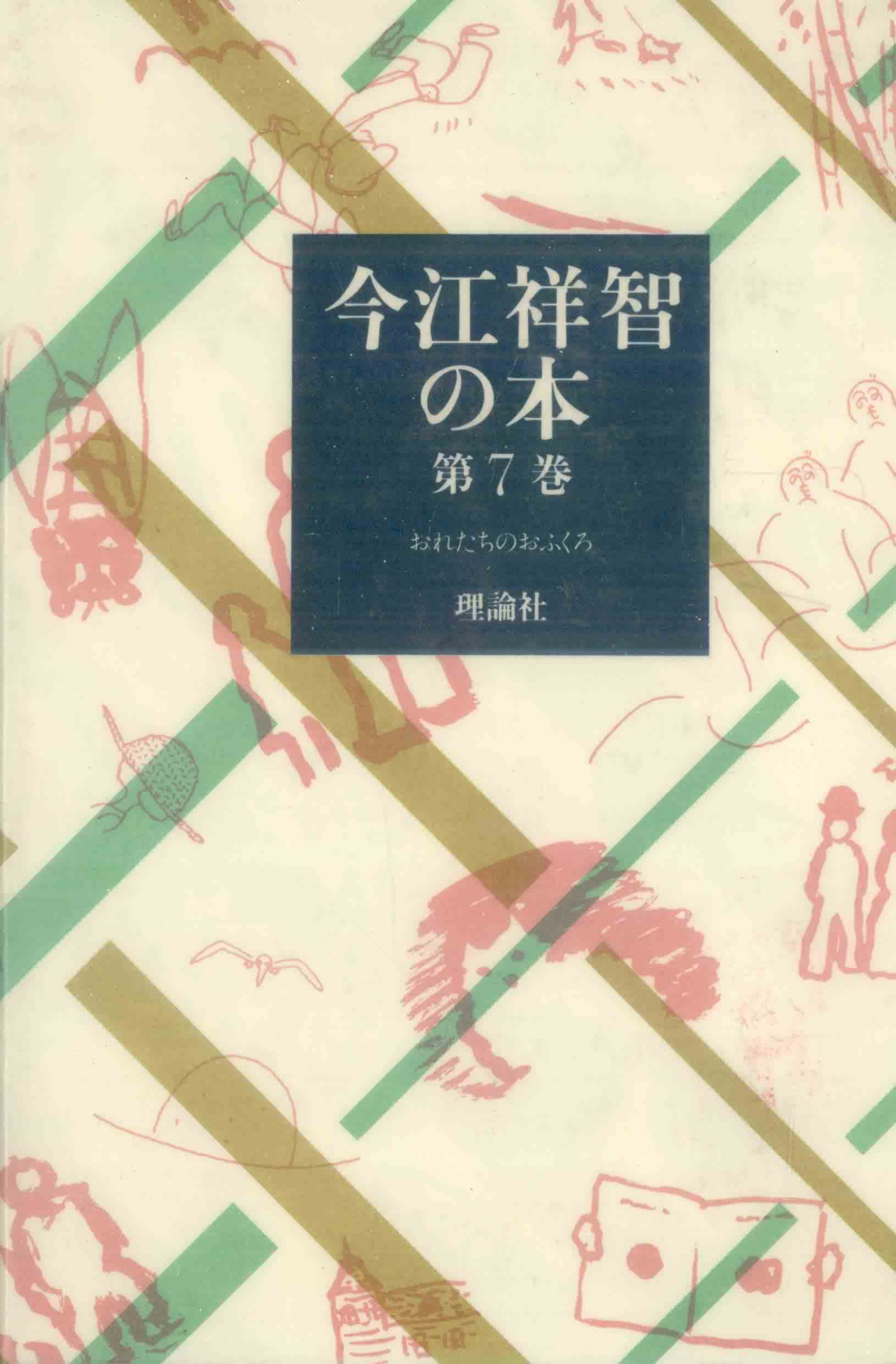




今江祥智 の本

第7巻

おれたちのおふくろ

理論社

今江祥智 の本 第7巻

おれたちのおふくろ

理論社

今江祥智の本第7巻

一九八一年十二月初版

一九八七年七月第五刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三) 五七九一(代表)◇

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



おれたちのおふくろ

第一章	と・き・よ・と・ま・れ	7
第二章	明治テニス小誌	21
第三章	何処へ	36
第四章	ああ、活動大写真	50
第五章	日傘とカンカン帽	65
第六章	コロッケの唄	78
第七章	ある日息子がやってきた	90
第八章	長男出生	104
第九章	赤い蛾の舞った日	115
第十章	世界は広し	128
第十一章	安定感について	140
第十二章	二つの人形	153
第十三章	蛭と帽子と天守閣	167

第十四章 母さんの一番長い一日 181

第十五章 不思議な贈物 203

第十六章 二人の女 216

第十七章 正月の歌 229

第十八章 生霊死霊 243

第十九章 神隠しの日 254

第二十章 川を渡らなかった夜 265

第二十一章 やや抽象的に 287

第二十二章 孫とキョーサンと 296

第二十三章 東京のモンタン 310

第二十四章 死 325

あとがき 337

解説 小宮山量平 339

編集委員 上野瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ ー トラヤ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本 第7巻

おれたちのおふくろ

第一章 と・き・よ・と・ま・れ

1

洋は、飛行機を見るのは好きだが、乗るのは好きではない。見るのなら、飛んでいる本物から紙飛行機まで、また、飾り窓に並べられた模型飛行機でも映画に出てくるのでも、美しいなと思う。けれど、自分が乗ってあの高い空の上を飛ぶとなると話はちがってくる。

初めて乗ったときは、もの珍しさがいっぱい、窓におでこをくつつけるようにして、地図とそっくりの「下界」を眺めおろしていてあきなかった。目的地の飛行場につくまでは、五分とはかからないように思えた。

ところが、二度目三度目に乗ったのが、ゆれにゆれた。エア・ポケットに落ちる。雷が落ちる。プロペラの調子が悪くて止り、片肺飛行になる。その度に、そのまま飛行機がおっこちてしまうのではないかと思われるくらい大ゆれした。

閉口して、以来できるだけ飛行機は使わないようにしてきた。

その洋が、飛行機——それもジェット旅客機に乗っている。羽田発—伊丹行の大型機で大阪にむかっていた。

しかもそのあと、伊丹空港からすぐに高知へ飛ぶつもりでいた。そちらは洋が嫌っている。よくゆれるプロペラ機——YS 11型だったが、いまの洋には、それがゆれることよりも、その切符がまだとれずにいてキャンセル待ちということの方が心配だった。

*

一九六七年二月の第二日曜日の早朝、洋は電話のベルの音でたたき起された。しばらくぶりに聞く兄の洋次郎の声がうわずっていた。

—おふくろが急にあかんようになってしまった。危篤^{きとく}や。すぐきてんか。一番機に乗ってんか……。

せつかな洋次郎はそれだけ言うた電話を切ってしまった。洋は受話器を見つめ、いま消えたばかりの兄の言葉を書いてよこしてくれていた。おふくろがキトク——やて……。そんなん嘘やろ。このあいだ病院から元気な字で葉書を書いてよこしてくれていた。春までには退院できますやろさかい、暖^{ぬく}うなったら三人で高知へ遊びにきて、にいちゃんにたかりなはれ……。と結んであった葉書の文字が、洋の目の前にあざやかにうっすらと残っていた。朝日が真

新しい雪の華の一つ一つをきらきら輝かせてのぼってきた。嘘やろ嘘やん……。洋は頭の中でも一度そうくり返し、こんどは口の中で、

—嘘や嘘や嘘や、おふくろが死ぬやなんて嘘や……。

と、お経でも唱えるようにつぶやいていた。

それから、急に子どもに返ったように、

—おかあちゃんが死ぬやなんて、嘘や。

もう半分涙声になっていた。

嘘ではなかった。しかし、それが嘘になるように祈りながら、洋は機上の人になっていた。日曜日のことだし、手もちの現金が少なかったこともあって、まず自分一人が、電話のあととびだして、とにかくこのジェット機に乗ることができたというわけだった。

上昇していた気配が消え、シートベルト着用のサインが消え、水平飛行に移ったのも気づかずに、洋は緊張した顔つきで、ま正面むいてしゃっちょこぼって坐っていた。それを、飛行機恐怖症のお客と見まちがえたのか、スチュワーデスが、ほほえみながら近づいてきて、お客さま、もうベルトはお外しになってお楽になさって下さい……と声をかけてくれた。

―あ、そいつはどうも、失礼をいたしました。

洋は、なんだかそんな返答をしてしまい、スチュワーデスはこらえきれず、ふりむいて小さく吹き出した。洋はシートベルトを外そうとやってみて、反対に締めてしまった。スチュワーデスは、吹き出したおわびとでもいうように、親切にベルトを外してくれた。

―や、これはどうも、有難うございました。

洋は恐縮して、小学生みたいに坐ったまま気ヲツケの姿勢になった。それからやっとなスメの姿勢にもどって、初めて水平飛行に移っていることに気がついた。窓の外には厚い雪雲をつききったはるか上の光り輝く青空があるばかり、ジェット・タービンの音もふいと静かになって、ゆれもほとんどなくて、洋はまるでどこかのビルのオフィスの椅子にでも腰をおろしているように思えた。

念のために、窓の外にもう一度目をやってみる。

青空ばかりで雲ひとつなく、これでは飛行機はほんとに飛んでいるのかどうかも分らないくらいだった。

旅なれたようにみえる外人客が一人、前部座席から立ってトイレへ歩いていった。高い靴音がひびいて、一歩ごとに、飛行機が小刻みに貧乏ゆすりでもしているように思えたが——それは洋の飛行機嫌いからくる恐怖心がつくりだした妄想だった。ジェット機は身ぶるいひとつせず、高度一万二千メートルの空にうかんでいた。そして新幹線の何倍もの速さで大阪にむかって飛んでいた。

スチュワーデスがジュースを配って歩いた。洋には人一倍親切に、お召上りになれば気分も落ち着かれます、おかわりもございますし……と声をかけてくれた。礼を言いながら、初めてその横顔に目をやった。誰かに似ていると思った。

（そうや、森さんや、森礼子さんや……）

小学校の二、三年生のとき同じクラスにいた女の子で、女の子たちのボスで、洋は森さんの肩くらいまでしか背丈がなかった。森さんは、そんな洋が、がき大将の東本くんらにとっては、いじめる格好の標的らしいとみてとるや、弟のように洋をかばい、

—この子に手エだしたら、わたしが承知せえヘンで。言うときさかいな……。

と、保護宣言をだしてくれた。

そして言葉どおり、それでも洋にちよつかいをかけた東本くんをどやしてくれた。

（そうか、森さんがいっしょに乗ってくれてんのか。ほならもう安心や……）

洋はあのころにかえった気もち、森さんの大きな体のうしろにかくれるようなほっとした気もちになって、朝から胸にためていた苦い重いものを吐息にしてはきだしていた。やっと気もちが楽になり、そのまま座席にもたれると目を閉じた。閉じて、ほとんど数分もしないうちにまどろんでいた。夢はみなかった。洋は電話の前の眠りのつづきの中にいた。黒い、まっ黒いだけの何もない「無」の世界に一人うかんでいた……。

体がふうわりともちあげられ、すぐにすんと落とされて——洋は目をさました。一瞬、どこにいるか見当がつかなかった。短くても深い眠りの中にいたせいだった。どこかのデパートのエレベーターが屋上につき、その足でおり始めたのかな——と錯覚していた。けれど、エレベーターの外には、青空があった。その青さを見て、洋は自分がジェット旅客機の客として空にうかんでいることを思いおこした。

(それにしてもさっきとちょっとかわつたらヘンな、あの空は……)

どこまでも光り輝く青空がひろがっているばかりだから、そう感じてしまうのも無理はなかった。

(時間がぜんぜんたつとらん感じや……)

洋が腕時計を見ようとしたとき、アナウンスがあった。まもなく着陸態勢に入るというのだ。

(ほんまにもうそんなに飛んでたンやろか、そやけど、時間が止ってたみたいに見えるンやけどなあ……)

それならばいっそ、ときよ、止れ……と思った。そしたら、おかあちゃんもずっと死なヘンでもすむやないか。そうや、ときよ、止れや……。

洋は心の中で小さな男の子になって、右腕をたかだかとあげて叫んでいた。

——ときよ、と・ま・れ……。

すると、まわりのものすべてが静止した。

バラの蕾は開きかけのまま、蝶は薄い羽根を半開きにしたまま、風もそよいだまま、煙も風にたなびいたまま、ころびかけた女の子もそのままの姿勢で、牛はたべようとした草に短い首をのびたまま、木こりも斧をふりあげたまま……。

(これはどこかで見たことある景色やないか……)

と、幼い洋は考えていた。

(そうや、『ねむりひめ』の話や。おかあちゃんがしてくれた、たった一つのちゃんとしたおはなしやった……)

かあさんは自分は大だらいの前に坐り、幼い洋を横の木箱に坐らせて、ながながと洗濯していた。しながら話をしてくれていた。いつものでたらめな話ではなく、めずらしく、昔のフランスのお話やで——と前置きしてから……。もともと、かあさんのは自分流に脚色してあったから「原話」とはだいぶちがってはいたが、それでも洋には新鮮だった。

—お姫さまが紡錘にさわらはったとたん、あーら、ふしぎ。なあもかも、びたっとうごかへんようになってしまいはりました。風も止って眠りはじめ、鳥も飛びながら眠りはじめ、お城の中の人もみんなぐっすり眠ってしまいました——とオ……。

聞きはれながら、洋は心配になってきた。そんな、みんな眠りこんでしまったら、世の中、しーんとさびしゅうなってしまうがな。いったいどうないしたら目エさましてくれはンねんやろか。

かあさんはあわてずさがらず、洗濯物をこすりあわせるテンポにあわせて話をつづけていった。洗濯もののあるあいだじゅう、眠るものの名がつづけられ、もうそろそろ洗濯するものがなくなるとみるや、王子さまを登場させた。やっぱり、と洋は胸をはずませ、いったいその王子さんがどうないしてみんなを起さはンねんやろか——と、いぶかった。

かあさんはすべての洗濯物を洗い収め、しばってしまおうと、たらいの水を勢よくあけながら、その水音のどさくさにまぎらせて早口で言った。

—そこで王子さまがねむり姫にくちづけをしはると——なにもかもが、いっぺんに目をさましはったンやとオ。

……おしまい。

洗濯の終りがおはなしの終りになった。しかし、かんじんのところが聞きとれなかった洋は不満だった。

「なんでや、なんでやのン、おかあちゃん……、どないしたら、みんなが目エさまはったンやて？」

くいきがる洋に、も一度「くちづけ」という言葉を発音したくないかあさんがいいつけた。

「さ、お話したげたかわりに、ほすのン手伝うてや。」

洋は仕方なしに立ちあがり、小さな方の洗い桶ごと洗濯物をかえあげると、かあさんにつづいた。いまのいままで、かあさんの横に坐って、それこそ物語の中の人物と同じように、身じろぎもしないで聞いていた洋だったのが、いま、洗濯のおしまいと同時に、王子さまの「くちづけ」で眠りからさめ、動きだした連中同様、動きだしていた。地下の洗い場から玄関の三和土^{たき}へあがり、二階の物干し場まで、ついてあがった。

「ええお天気やさかい、じつきに乾きますやろ……。」

うれしそうに言うかあさんに、洋はうなずきながら、まださっきの疑問にかあさんが答えてくれないのが不満だった。けれどこの秋晴れの空を流れる綿雲を見上げていると、もう二度とあのうす暗い眠れる森のお城へはかえれず、そのことにはふれられない気もちにされてしまうのだった……。

雲が走る。薄いきれいな巻雲が、つういつういと空を走る。雲は洋の眼^め下^{した}を走っていた。いつのまにあんな上のが目の下に——と首をかしげて、洋はわれに返っていた。

ジェット機の下を雲が走っていた。洋を乗せたジェット機はその雲のあいだをゆっくりと（ほんとはすばらしい速さで）通りぬけ——地上にむかって降下し始めていた。

案じていたとおり、キャンセル待ちになっていて、切符は一枚もないと言われた。洋は待合室で、いらいらしながら坐るしかなかった。そうしながら、洋は自分の気もちが細胞分裂のように、ぼっかり二つに分れるのが見えた。片方の細胞は、何とか切符を手に入れて乗りつぎ、おふくろさんの末期の水をとりたい、せめてものことにそれだけはしたい——と焦っていた。それなのにもう一つの細胞は、それとは逆に、自分が大好きだったおふくろさんの死の——断末魔の苦しみなんか見たくない——と逃げ腰でいるのだった。そんな、相反する二つの気もちを、洋は顕微鏡で眺めるように、思い描き、眺めていた。どちらも本心だった。細胞は二つに分裂したまま、ミジンコのように、洋の頭の奥で、びくびくはねまわっていた。

——……号便の高知行きのキャンセルをお待ちの方、一番から三番様までおいで下さい。

突然のアナウンスが、洋の細胞の一つをはじきとばした。洋はひととびで窓口へかけつけていた。自分はたしかに二番のはずであった。

係員はいなかった。いそいでかけつけたあとの二人と、三人が顔を見合せた。黒ずくめの服装に、真冬だというのに濃いサン・グラスをかけたおあにいさんふうな三人目が、しびれをきらししてどなりつけた。

——誰かおらんかよ。ち、人をよびつけちよいてよ。

その声でや々と若い女性の係員が顔をだした。

——おんしゃ、三名様こいちゅうたやろが。

——それがそのう……キャンセルではなくなりました……。